

## 同じ風が吹いたら

木村令胡

あらためて見回してみると、息を潜めているかのように色彩の乏しい部屋だった。その中で、炬燵を囲んでいる緋色の座布団だけが遠慮勝ちに息づいている。お正月も終わったのだから片付けなくては、と思っていた。陽の差す日に、ちよつと陽に当ててやつて軽く叩いて、それから仕舞いたかった。

東京に在住する妹夫婦が送つてよこしてくれた座布団だった。結婚のお祝いに戴いたものだったらしいのだが、洋風な生活形態の中では、この座布団の出番がなかったらしい。それでも何時だったか私が滞在していた時、私の為にそれを一枚引つ張り出してきた。

私が座ると、「どおしてえ、妙に似合っつ」と、妹夫婦は手を叩いて可笑しな感動をしていたが、我が家へ帰り着いて間もなく追いかけるように五客分のこの座布団が送られてきた。

「座布団といえども人を選ぶのだ、ということに此の度気付かされました。似つかわしい方に座つていただきます」。彼の文字だった。

まるで、お控えなすつて！ の世界じゃないの。  
ま、奇妙な成り行きの事ではあつたけれど、私は素直に喜んで頂戴した。なんだかわけもなく嬉しかったのだ。

このご祝儀物の送り主はおそらく、あちらのおばあさまに違いない、と思つた。荒らした手で触れたりすると指が滑らないまま織り糸を引つ掛けてしまふような、超上質の絹織だった。緋の色も、絹糸ゆえの品の良い鮮やかな光沢を醸し出している。

日本舞踊の師匠をしておいでだった方だからだろうか、織物には特に金にいとめをつけぬ買物をされていた、と聞いていたことを思い出した。

荷を解くと、早速その一枚に座つてみた。ふくふくと優しさが伝わってくる。もし、私が自分の好みで選んでいたら古代紫か、ちよつと頑張つても花紫あたり落ち着いて、この部屋の景色を変えることはなかつたであろう。

緋の色が血の気の乏しい頬に映つて染めあげ、熱くて元気な血液が補充されたよつな気がしてくる。ふと、妹夫婦が手を叩いて喜んだあの時の表情が甦つた時、

帰省した私の後を追うように送ってくれたその気持ちが見えるような気がして心が和んだ。

十三も歳の離れた妹だった。

+

この地方ではその頃、旧暦の一月七日の七草の日に数え年で七歳の祝いをする。ずっと昔は、幼子を七歳まで無事に育て上げることすら大変なことだったのだろう。疫病や、さまざま事故などで、たくさんの子子を亡くした親たちの涙がこの祝いの日を生んだのかもしれない。つまり「よくぞ七歳まで無事に育ってくれた、もう大丈夫」。と我が子の成長を喜び、氏神様にお礼のお参りをする日なのである。

七草の日に着せる振り袖も仕立てあがった。母は早速妹に着せかけ、肩上げの待ち針を打った。

その日の母の目尻は下がりっぱなしで屋根の雪も融かしてしまいそうなほどに笑みがとめどなくこぼれ、気が付くと眺めていた私にもその笑みは移っていた。妹の祝いごとは、すでにあの時から始まっていたのだ。

「七草叩くなに叩く、唐土の鳥と日本の鳥が出会わぬ先に、トントン、トントン……」

一月七日の早朝、俎板の上に七草を揃えてザクザクと切り、さらに両手に持った包丁で叩くのだが、その時に調子を取るように口ずさむ我が家のしきたりというか、癖のような、といえなくもない古い唄だった。口伝え、聞き覚え、で歳月を経るうちに何かが抜け落ち、変形もしているのかもしれないが、数え七つの妹はその正月、この唄をあの前日までこっさり得意気に繰り返し口ずさんでいた。もうすぐ主役になれる晴れの日を待っていたのに違いない。

それなのに医師の誤診が招いた治療ミスで、妹はまるで手品のように唐突に命が消えた。昨日まで唄っていた妹が、翌日には息を止めてしまったのだから。

あの時、禁じられていた水をあんなに欲しがり、普段は決して無理を言わない子が泣いて、懇願して、家族を困らせていたのに、不意に何も言わなくなってしまう……。

聞き分けたからではない。たとえ許されても、もう喉を鳴らして水を呑むこと

ができなくなってしまうのだ。

あの唐突な静けさの、鳥肌がたった堪らなさ、悔しさを決して忘れることはないだろう。母は、あの時遺体をかき抱き「こんなことなら、こんなことになるのなら、この子の気の済むまで水を吞ませてやるのだ」と、しほり出すような声で喚き、己れの身体ごと妹の体をゆさぶってたてる悲鳴は納まり所を無くしたようにいつまでも彷徨い続けた。「もつ一度、必ずお母ちゃんの子供で生まれ来てね。約束して！必ずこのお腹に帰って来るって。今度は色白でなく、活発で丈夫な子に生まれて来てよ。何処へも行かず、ここへ戻って来てね。待っているから……、いつまでだって待っているんだから」

私を家まで走らせて持つてこさせた、祝いのはずだった仕立て下ろしの振り袖を、すでに硬直した冷たい妹の身体に着せて父がしっかりと背負い、祖母の角巻きを頭から深く被つて二人は一つになり、病院を出た。

天井が抜け落ちたかに、どんど、どんど、と限も際限もなく白いものが零れるように落下し続け、見る間に地面を覆いつくしたそれを吹き上げる地吹雪が幾度でも狂ったように挑みかかって来る。自動車も人もまるで動こうとしない、記録的な大雪の日であった。

立つて歩くバランスを完全に崩してしまった母の身体を全身で支える私は、道なくなつた雪の中をずぶずぶと足をとられながら、傾いたままの身体で転がるようにして、ひたすら家路を探つて急ぐ父の背中を見失うまいと、ただ懸命に追いつけた。

どんな言葉で説得され押し戻されても、私たちはあの時あの病院から一刻も早く遠ざかりたかつたのだ。

「七草のお祝いは何が欲しい？」

「絵本をいっぱい欲しい」

「そうか、よしよし。病気が治ったら絵本を買いに行こうな」

「ほんとう？」

「本当だとも、だから一日も早く病気をやつつけてしまおう、な」

あしたも、あさつても、しあさつても、当たり前のように続くのだと信じて疑わなかつた日常が何の前触れもなしに断ち切られた時、何に繋がればよいのだろつか……、と惚ける一瞬がある。そしてその後悲しみや、恐怖や、怒りの感

情が襲ってくるのだ。

振り返るとあの時の私たちは、非日常が起きてしまった現場に居た堪れずに逃げただけではなかった。それは私だけの感情だった。父自身は胸中の嵐と窓越しに見る尋常でない風雪を秤りにかけ、天候に逆らう危険を妻と子のために避けなければと口を真一文字に結んで必死に踏み堪えていたのだ。しかし妻の、悲痛も憤怒も抑え切れずに、いや抑えようとする無理がキリキリと怨恨に向きを変え、一線をも越えようとする危うさに気づいた時、父は硬直した妹を背負い私を急がしたのだ。

そして私たちは荒立つ胸の内と向き合うような厳しい悪天候と格闘しても、家路を辿ることになったのである。

四つん這いになり、ようやく立ち上がった途端に尻餅をつき、母を支えるはずが諸共にまた雪の中につんのめり……、で家へ辿り着いたのは水をかけながらガチガチに仕上げた雪だるまのような親子四人の姿だった。

なのに何度思い返してみても、あの日のことは映像としては鮮明に残っているのに、感覚の記憶は欠落している。寒さとか、冷たさとかの。

奇妙なほどにあの日の映像だけが鮮明なのは、きっと十二歳の少女の胸の奥にも雪が降り積もり、吹き荒んでいた風景と重なるからなのかもしれない。

+

その翌年の六月、母は女の子を出産した。嘘のような話だけれど、小麦色の肌に骨太の感じがいかにも丈夫そうな、元気な赤ちゃんだった。

両親は亡くした子の名前をそのまま付けたかったのだろう。が、当然受け付けられなかった。それで同じ読みの漢字を探し、同じ呼び名で届け直したのだ。

後年、母が長い病の末に息を引き取る時、

「あの子が無事に育ってくれてさえいたら、こんな時どれほど安心して逝けたか……、六つ違いの妹なら姉の力にも相談相手にも充分なれただろうに。あなた一人に何もかも背負わせてしまうことになってしまったねえ、堪忍してよ」

亡くした子の生まれ代わりと信じて未っ子をいとおしみ、逝ったあの子の話をお忘れたようにしなかった母が突然その名を呼んだ。私と六つ違いと言うのなら間違いなくあの子のことだ。親とは先立っただ子の歳を胸の奥で秘かに数え続けて生

きるものか、と胸が軋んだ。更に、息絶える間際まで後を託す娘の心労を氣遣う母親の情が切なかった。

母が逝って、もうすぐ二十三回忌になる。ただ無我夢中で生きた短くて、長い歲月だ。

+

私は炬燵に膝を入れて、呆んやりと盃を傾けていた。

名水を口に含んだ時、『寒露、寒露』と、人は感動したりするけれど、いま酒を口に含んだ時に名水を偲んでいたことに気づいた。岩を伝って落ちてくる水音や、水の走りまで身近に感じていたような気がする。私は舌の上で、それをころがしてみる。

にわかに冷え込んできたような気がしていたが、外は雪にでもなったのだろうか……。耳が闇夜になったように、音の消された夜が緩る緩ると沈んでいく。

じわっ、と睡魔が擦り寄ってきた。私は背に当てていたクッションをはずして、座っていた炬燵の側面に沿ってそろそろと横這いになり頭の下に敷いた。途端に目の中に緋の色が飛び込んできて滲むように広がった。眼前に、あの座布団が両膝を半分炬燵の中に入れる風情で鎮座していた。

私が、それに添い寝する形で横になったからなのか、上向きになったほうの右手が、わけもなくなぞるようにそれを撫でていた。そうしている内、眠りに入っただものらしい。

眠りの途中で私は、自分のではない誰かの寝息を聴いていた。幽かな気配だけれど、確かに私の他に誰かがいた。気取られぬように薄目を開けて探ると、数え年の七つで死んだはずの妹が、あの緋色の座布団の上であどけなく眠っていた。そのことに気づいた瞬間、頬がほてるような幸せが満ちあふれてくるのを感じた。とろけるような優しさが顔面に広がってゆくのがわかる。そしてなぜだか、目を覚ましてはいけなかったのだと気づく。だから私は、とても急いで眠ったふりをする。が、微笑みが泡のように生まれて、噛み殺しても噛み殺しても頬が緩んでしまう。

……大丈夫。おだやかな寝息がすぐ耳元で続いている。

私に、すっかり忘れていた我が子に添い寝した母親の感覚が戻っていた。思い出すことさえ忘れていた、うっとりするような甘くとろけるような幸せだった。

突如、電話のベルが鳴り響き、静寂を引き裂いた。

私に、掌にのせていた大切なものを取り落とし驚愕の記憶が生々しく甦って重なる。(間違い電話に違いない。お願い。早く鳴り止んでー)

(諦めて受話器を置いてよ。こんな時刻に人の声を聴こうなんて……、そんな期待を持つこと自体どうかしているんだわ。いい加減諦めなさいってば)

傍らで眠っている子のことを思うと、うっかり身体も動かせないのだ。というより、本当は自分自身が覚醒することから逃げていたかったのかもしれない。

しかし、もう再びあの感覚の中に戻ることはできなかった。

諦めて、傍らを気遣いながら起き上がり、妹の様子を窺った。

・・・誰もいない。

「節ちゃん」

私は、六つ違いの妹の名を呼んだ。そして節子を探した。他の部屋を覗き廻り、台所も、風呂場も、トイレも……。更に玄関の鍵を確かめ、再び家中を歩き廻った。

「勢津ちゃん……」

探し廻っているうちに、妙なことに気づいた。捜している相手が東京の妹と擦り替わっている。……いつから？ どの時点からなの？

私は六つ違いの妹に添い寝していたはずだ。なのにいま私は十三年下の妹を探している。どうしてしまったのだろう。お酒に酔ったのだろうか。いや、酔い痴れる量は呑んでいなかった。もしかして、こういうのをアルコール中毒というのだろうか。それゆえのトリップだとしたら大変なことだ。私が私でなくなったら私は一体誰になるというのだろう。意識の外側では、そんなことを確かに考えているのに、別のところではまだ先刻の甘美な幸せの余韻にしがみ付き、記憶をまさぐり続けていた。

けれどもいま思い返し、懐かしんでいる私のあの頃が、その時それほどに幸せの実感を受け止めて生きていたといえるのだろうか。

我が子の突然の泣き声に眠りを中断されることなく、朝まで一気に眠りこけることのできるこの先を待ち望み。・・・たとえば妹たちのことにしても、子守から解き放たれ、読んでいた本の続きに没入できる時間の来るのを待ち望んでいたはずだった。

そしてこの先いつか、私は今のこの頃のことを懐かしむ時がくるのかもしれない

い。人の心とは仕方のないものだ。いつも、いつも振り返っているか、待っているのだ。

なからえば またこの頃やしのばれむ

憂しと見し世ぞ 今は恋しき

百人一首の中の藤原清輔朝臣の歌が浮上してきて、私の想念に重なる。

気づくと再び盃を傾けていた。中断された先刻の陶酔感にもう一度すがりつきたいのだ。 夢でも幻でもいい。 醒めたあとの寂寥がどれほど重たく、意地の悪いものであってもいい。 吐いたら、吐いた分までまた呑み込んででも、もう一度あの感情、あの感覚に寄り添いたいのだ。 本当のところ、謎解きの済んでしまった幻がまぼろしであるはずもない。 正体を暴露されたお化けが、もう二度とお化けにはなれないように。

冷やかに吐き捨てる自分に背を向け、私は性急に盃に酒を注ぎ足した。

堕ちてゆく感覚とはこういうことなのだろうか。 これ以上の量の酒は毒だと知りつつ呑むことも、たとえばきつと麻薬なんかのたぐいも同じなのだろう。 いま止めなければいけないことも、このまま続ければどうなるかということも、知っているのに、負ける。 突き進めば地獄が待っているだけの禁断の恋慕もそつだ。 結果を知り尽くしているのに、どうしても折り返すことができない。

目を瞑ると激しく揺れる。 廻る。 引き込まれるように沈んでゆく。 ぐい、ぐいっ、と果てしなく引き込まれてゆく……、これが堕ちる、堕ちてゆく感覚なのか、と見据える。

それはそれでいいじゃないの、もう一度だけ再現したい感覚に向かっていいるのだから。 自分で納得して向かってゆくのだから。

本当は私、言い訳しているのかもしれない。 背反している自分に。 背反する者の存在があるうちは先刻が戻ってこれるはずがないことを本当は知っているのに、それを蹴散らすようにしてひたすら私は酔い痴れる感覚に取り絶った。

その時だった。 出し抜けに悲鳴ともとれる音声が喉の奥から這い出してきた。

そつだ、思い出したのだ。

の内科病棟から追放されて自宅に戻った。

娘たちを嫁がせた後の両親は片寄せ合つての二人暮らし、傍目にも穏やかな暮らしが始まつたかに見えていた矢先だつたのに、古い支度までにはまだ充分に間のある年齢で、何を慌てたのか母はわずか半年の病院暮らしのすえ入院先の病院から旅立ってしまった。後になって考えると、その数年後に父を見舞つた脳卒中の起因は体質もあつたにせよ、この時から始まつた一人暮らしの気促さが取り込んだ生活習慣に因るところが大きかつたのだ。人間に先が見通せるのなら、たとえ望まれても長女を責任ある跡取りの長男には嫁がせなかつただろう。末の娘が好きになつてしまつた人でも、遠くの人との縁組は渋つたかもしれない。この家の一人息子、私のすぐ下の弟は姉と妹が嫁いですぐに夭逝したのだ。

安静を強いられた長い病院生活が、父の惚けるのを早めたことは確かだけれど、病院側は因果関係を論ずるより結果の始末を急がなければならぬのだ。個々の家庭の事情なら限も際限もなくある。関わり始めたら、それこそ限も際限もなく混乱するだろう。大病院に廻された患者と家族は、もう町医者との血の通つたコミュニケーションの領域には懐かしんでも戻れないのだ。

長く住人の居なかつた家に命を吹き込むのは、容易いことではなかつた。けれどすでにお尻に火が付いているのだ。嫁ぎ先への気兼ねと、病院への言い訳と、父を連れて帰つてからの時間のやり繰りをどうすればいいのか……。

気が付くと私の頭の中にはいつ果てるともない吹雪が立ち騒ぎ、雪に埋もれて立往生した少女の頃のあの日の光景が渦巻いていた。

ようやく父を連れては帰つたけれど、一時も目を離せないわずか数日で、私は憔悴しきつてしまつた。見兼ねて東京から妹が応援に来たが、交替で、という計画は甘かつた。老いたりといえども男の必死な力に女一人では太刀打ちできないのだ。

姉妹二人で父に付きつきりの日が続いたある夜、炬燵に足を入れ、座椅子にもたれていた父がつた寝を始めた。その真向いで肩を寄せ合うように並んで炬燵に膝を入れ、父の様子を看ていた私たちはどちらからともなく舟を漕ぎはじめたところまでの覚えはある。しかしその二人が何時、どんな情況を経て横になつたのか、そこからがどうしても思い出せないのだ。数日振りで思い切り身体を伸ばした心地好きが一気に眠りに向かわせてしまつたのだろうか。たしかに神経も肉体も精根尽き果ててはいた。



それからどれほどの時間が経過していたのだろう。

間近に濃い気配を感じて目を開けると、すぐ真上に父の顔があった。傍らの妹は前後不覚の体で寝入っている。私たちは知らぬ間に炬燵の中に深く身体を潜り込ませて、本格的に眠りこけていたのである。父は座っていた真向いから炬燵板に両手をつき身体を支えて中腰になり、身を乗り出して私たち姉妹の寝顔を上から覗き込んでいた。目が合つと父は微笑んでいる。喪つた遠くを見るあの虚ろな視線ではなく、そうだ、生まれたばかりの我が子を初めて覗き込む父親の眼差しだった。初々しい父親の、幸せをはにかんでいるくすぐったい表情だ。私に、とても懐かしい憶いが押し寄せて来た。

でもなぜだろう。すぐ隣り合わせに哀しみが震えて佇んでいる。胸の奥の奥から嗚咽が突き上げてこようとしている。私はそれを懸命に抑えた。いま一滴の涙でも零してしまつたら、一息でもしゃくり上げようものなら、それはとめどなくあふれて納まりがつかなくなるに違いないのだ。いまは絶対に泣けない。私は息を詰めて父の眼差しの中に滑り込み、ようやく微かに笑みを返せた。その時、父はとても満足気に堂々と頷いたのである。

不意に、いま父は娘たちの寝顔を覗き込んで幸せに浸っていたのだった、と気づき、激しく胸を打ってくるものがあつた。そして、同じ幸せは私の中にも流れ込み、滲むように広がつてゆくのがわかつた。

「なにか食べましようか」

私はこの時、自分の優しさにとっても満足していた。無条件に誰をも許したくなる、そんな幸せだつた。

父が嬉しそうに頷くのを見て傍らの妹に目を移す、と「大丈夫だ、お父さんがちゃんと看ているから」。父のその言葉に一瞬息を呑み、振り返つたが結局何も言えなかつた。私は妹を起こさぬよう静かに炬燵をでて、台所に向かつた。

かつての平常が戻つて来たような錯覚に、このまま騙されていたと思つた。この幸せがすこしでも長く止まってくれますように。そのためになら私、なんでもできそうです。胸に手をあてて祈るように願つた。

その時、向き合っている流し台のガラス戸越しに、こちらを覗き込んでいる老女の険しい視線に気づいた。乱れた髪が顔つきをより険悪に見せているのか、暗鬱な眼差しを向けているその人相のおぞましさに息を呑み、声もなく身体が固まつた。

けれど次の瞬間、空気が抜けるように身体中の力が抜け落ちた。

私は散らばった髪の毛をそくさと掌でなでつけ、タオルを絞って顔面に当てた。(ああ、怖い) 潜めていた私の内面が、実体よりはるかに鮮明にガラス戸に映って見せたのだ。私は対峙する者を蹴散らす勢いでごしごしと顔を擦った。

しかし、先刻の父のことを振り返ると冷汗がでた。疲れ果てていたとはいえ、私たち姉妹は自分たちの本分を忘れ、揃って眠り込んでしまったのだ。このまさかの信じがたい無防備、無責任な失策には、まだこんなに身体が震える。いつ、ここからさまよい出て、どこへ行ってしまふのかもわからない父を一人置き去りにして、我を忘れて眠りこけてしまったのだから、父は抗う者を押し退ける面倒もなく簡単に解放されたはずだ。

一日に何度でも、目を離したらさまよい出る父を監視し、押し止めながら私は、「どこに行くつもりなの」と、責めた。そして何度目かには声を荒げてなじり、泣いた。たいがいは「家に帰る」と、返事が返ってくる。「お父さんの家はここじゃないの」と、押し戻す私を父は必死の力で振り払う。父がああの際に振り払った相手は娘ではなかったのだ、とこの腕に付いた手形の痣を隠すように目を瞑った。

見ていると父の意識は次第に逆行して、どんどん遠くに行ってしまう。父の見ている景色はもう、私には見えない。父が帰りたい、という父の目指す家へ私が連れて行ってやることなどできっこないのだ。その家を私は知らないのだから、父にとっては絶好の夜であったはずなのに、この夜、父は出て行かなかった。

私たち姉妹はどのくらいの時間眠り込んでいたのだろう。ぞっとする数字だけれど、おそらく五・六時間の空白があったことを認めなければならぬだろう。その間中父は、私たちの寝顔に見入って動かなかったことになる。

そういえば、並んだ娘たちの寝顔にも父の歳月は重なるのだ。長女が生まれた二月。末娘が生まれた六月。父はどんな景色を思い出していたのだろう。這った、立った、泣いた、笑った……。さまよい出なくとも、捜し廻らなくとも、娘の寝顔を見ているだけで過ぎ去った沢山の時間をなぞり、今夜の父は充分に満たされていたのかもしれない。それとも父は、無防備に眠りこけている娘たちに気づいた時から、二人を見守るためにこの場を離れられなかったのかもしれない。もしかしたら気羞かしげに子守歌など歌ってくれていたのかもしれない。ずっと父の体重を支えていたあの炬燵板は、昔四人いた子供たちの全てを守った揺りかご

だったのかもしれない。それを時々そつとゆすってみたりしながら、過ぎ去った時間を父親として再び生きた濃密な夜だったのかもしれない。

突然、茶の間で妹の悲鳴があがった。

駆け込むと、仁王立ちになった父が、おむつをむしり取るように外している。異臭が鼻をつく。大量の便がこぼれて散らばった。

妹はぼろ布とビニール袋を持って畳の上を這いずり、私は父の身体に付着している汚物を手早く始末する。仕上げに湯をたっぷり使って身体を拭いた。すこし前まではおむつを嫌い、トイレにも介添えの手を振り払い、一人で入って中から鍵をかけた。不様を見せたくない父の恥じらいが、必死に、確実に生きていたのに……。今の父は、言われるがままに仁王立ちの体勢で両足を開き、始末が終わるのを幼子のような表情で待っている。仕上げの合図のようにタオルをバケツの湯の中に放した時、両膝立ちの私の肩先を、同じ体勢を崩さずにいる父の指先がチョンチョンと突いた。見上げると、父はあどけなくのけぞって笑いながら自分の陰部を指差し、「ほら、まだ皺の間に残っているよ」と、言う。見ると、まさしく拭き残していた。娘であることの羞恥心が見逃してしまったのだろうか。

「あららっ、大変、大変」、わざとあっけらかんと言って退けて、拭き取る。交換のタオルを差し出す妹の肩が小刻みに震えている。

「ガン・バ・レ。頑張ろうよ」、私はむしる自分に言い含めるように声に力を込めた。うん、うん、と妹がうつむいたまま何度も頷いて、涙をすすった。と、妹のその鼻先にティッシュ・ボックスが私の頭越しに差し出された。炬燵の上に置いてあったものだ。妹はその箱から差し出している父親の顔にまで目を移すと、堰が切れたように号泣した。

そうなのだ。泣くのは看護が辛いからだけではない。汚物の始末に堪えられないのでもない。切れたり繋がったりする正常と異常の揺らぎが、我が親であるがゆえに切ないのだ。これは子供の頃に見た怖い夢のように、手をつないで歩いていた親しい人が、突然お化けになって脅かしてくるのに似ている。裏切られる恐怖……、それも繰り返し返し。

私の誇りでもあった父が、その存在自体が絶対的なものでさえあった父親が、今は幼児のように娘に身を預け、娘の管理下に身を置く。この現実を正視しなければならぬ成り行きを嘆くまい、と歯をくいしばるのだけれど、その力は日毎に強くなり、気づいたら奥歯が沈んだのか、すり減ったのか、顔つきが変わって

いた。

あの頃はまだ介護保険はスタートしていなかったし、痴呆については役所を歩いても情報を得ることが難しかった。いよいよ切羽詰まった時に、民間の付き添い婦派出所のようなグループから人を寄越してもらったことがあったが、痴呆の付き添いは捜すことのほうが大仕事なのだわかった。それにせつかく来てもらっても父が畏縮し、可哀相で見ていられなかったのと、支払う報酬の額の大きさに先行きが心細くなったこと、が父娘三人のこの背水の陣営体制であり、泣き笑い騒動の始まりだった。

つらを見せ

おもてを見せて散るもみぢ

良寛

良寛が向き合つた冬景色が、より寒々と身に染みたのはこの頃であった。

裏を見せ表に戻る繰り返しを見せながら、ゆっくりと萎えてゆく晩秋の落葉のような親を看つめ続ける苛酷な巡り合わせは、どう取り繕い、どう言葉を選んで、正直なところ子には地獄だった。切なさがつじやうじやと擦り寄り、這い登って来て血の痕を残してゆくのだ。しかしどんなに辛くても父一人を置き去りにして逃げることは出来ない。目を瞑ることは出来ない。陽が翳り、傾き、沈みきるまでを、しっかりと向き合つて見届けさせてもらった。

看る者も、看られる者も、それぞれがぎりぎりの淵に立って見せ合つた裏は、今となれば懐かしくさえある。激しい葛藤の日々を、親も娘たちもありつたけの力を出し切つて生きたのだから、と思ひ返す度、あの時期まるごとにおしさが込み上げてくる。

「皺というものは、ことのほか厄介な代物だ。始末がわるい。それになにより汚れが溜まって不潔でいけない。……たしかに醜悪ではある。が、泣くほどのものではないはずだぞ」 宣巻くその声に、私はおもわず吹き出してしまった。すると父は救われたように肩の力を抜き、端正な面差しをくしゃくしゃに崩し、無邪気にのけぞつて笑った。

父は、いつも惚けの隙間からおどおどと私の感情を窺ってるのだ。

洗濯が間に合わず昼間に急いで買い求めてきた浴衣地の寝巻を父の肩に着せ掛けると、この手をさり気なく払つた右の手で左衿下をつかんで左腕を通し、左手で反対側の衿下を押さえて右腕を通し、下腹で前身頃をゆったりと重ねた。と、そこで催促するように手を差し出した。この一連のなめらかな流れに気を吞まれ

見惚れていた私は、はっと我に返り慌てて平織りの細帯を手渡した。父はそれを受け取ると下腹に二度廻して、やや右前脇で結んだ結び目をシユツと首をたてて後脇にずらし、結び目を平手でパンと叩いて落ち着かせた。それから両の手を襟元にもってゆき上前下前の衿を揃えるようにしごく満足気に前身頃の裾を平手で割って座ったのである。

私は幼い頃から父親の和服姿が好きだった。肩に羽織った瞬間から始まる、着付けが進行してゆく動作の推移。そして歩く、座る、袖口を肩までたくし上げる仕草。汗ばんだ脛に裾が絡み付くと上前の裾をひよいとたくし上げて歩く、その粋で勇みはださ加減の妙……。私はこれまでにどれだけの数、息を詰めてそれに見惚れたことだろう。

それがいま、目の前で甦った。寸分の狂いもなく再現されたのだ。

「良い柄だ。これはおまえの見立てだね。相変わらずおまえの見立てはいい」  
機嫌のいい顔を私に向け、父はあどけなく言った。

やがて三人は炬燵の上に土鍋を置いて、出来たての鍋焼きうどんをすすり始めた。

真夜中の二時をまわっていた。

つい今しがた父親の粗相の始末をしたその同じ場所で、とても食物など喉を通るはずもないこれまでのコモン・センスが嘘のように消し飛んで、あの情景は舞台のがんどう返しのように瞬時に入れ替わり、残っている部屋の臭いにも鼻が馬鹿になってくれた。そんな生活が無理にも身に付こうとしていた。

父は、この茶の間がいいのである。

病院を追放されて自宅に戻って以来、この茶の間に居座ってしまったのだ。

うたた寝をするのも、本当の自分の家に、と捜しに出るのも、この茶の間が起点なのであり、飲食も、おむつ替えも、すべての日常がこの部屋で終始した。

最初の頃こそ、何度か父を寝室のベットに運んだこともあったが、すぐに出てきて茶の間の同じ場所に座り込んでしまう。その場所は、この家の家族が全員揃って暮らしていた頃からの父の座る場所であった。

父が病院を追われて帰るなり、この茶の間に座って動かないのは、昔のように家族が全員揃つのをずっと待っているからなのだろうか。

「お母さんはどこだ？」

そう聞かれたら、私はどう答えただろうか。

呼び集めようにも戻ってこれない、とうに旅立ちを終えた家族の名を父が呼びでもしたら、私は平静でおれただろうか。

茶の間の父と対座し、その虚ろな目を覗く。父が待っているのであろう家族の顔を、その瞳の中から一人ひとり丁寧に拾いだしてみよう。でも、とうとう父はその家族の誰の名も口にしないってしまった。胸を撫で下ろした裏側で、私はひっそりと錯乱した。寂しさと、切なさと、一時しのぎの安堵感とが入り乱れて。

すでに昼夜の区別も、日常の常識も、流れも、生まれてからのこの歳月で身に付けたコモン・センスさえ、跡形もなく消え失せている。父の感情を詮索し、決め付けているのは一方的な私の感情に過ぎなかったのかもしれない。もう、父と同化する以外に生きてみようがなかったし、それがお互いに一番楽な方法だと思ふところにもまで辿り着いた。

「一期は夢よ、ただ狂え」

いつからそれを言い出したのかわからない。が、知らぬ間にそれは疲れ切った自分を覚醒させるためのムチになっていた。奥歯はくいしばり過ぎてすり減ったのか、沈んだのか、もうすでに力が入らなくなってしまうていた。これはその代わりに引っ張りだしてきた自己再生グッズくらいのもりだった。……いや、きれいごとは言うまい。これは破れかぶれな、自分への捨て台詞だったのかもしれない、あの時まで。

あるとき、また私がそのムチを使ったらしい。

「閑吟集も、こつ浮かれ加減で安売りされては立つ瀬がなかつた。それに第一、解釈を取り違えているのだ。知ったかぶりは人間性を疑われるからよしなさい」「ちゃんと知ってるんです。これは単なる冗談じゃないですが、二気づけの！」

あれは、まるで高校生の娘だった。戻したのは、あの一瞬父に訪れた正気のせいだ。

父はゆっくりと頷き、私の目を覗き込むようにして微笑んだ。諭しと、許しと、慈しみが惜しみなく溶けだしたような深い微笑みだった。

しっかりと覚えておこう、とその時に思った。もうすぐ二度と出会えなくなる。この眼差しと微笑みは、親が子を育てるためにだけ与えられているものなのだから。そしてこの微笑みは、子らを皮膚膜のように包み込んで育て上げるのだ。…親がいなくなっただけからの歳月を思うと、破れた皮膚をぶらさげ、その愛を欲

しがる自分が見えるような気がして、心細さが戦慄となってこみあげてきた。

その戦慄のさなか、この感傷を咎めるかのように、突如、嫁ぎ先に残してきた子供たちの面影が過った。

「そつだ。甘ったれてる暇などないのだ。私にも妹にも、守らなければならぬ家族が待っているのだから」

毎朝同じ時刻に目覚まし時計が鳴り、歯をみがき、顔を洗い、朝食をとり、息子たちは学校に向かい、それぞれの一日が動きだす……。

どれだけの数、同じことを繰り返してきたのだろう。そしてそのリズムが、ある日突然に何の前触れもなしに崩れる日があることを考えてみたことがあつたらうか。崩れた時の対処を、一度でも想定してみたことはあつたか。

いまとなれば、必ず何らかのかたちで対峙しなければならぬこの未来図を、確実に抱えていたのだ。にもかかわらず、本気で考えることを先のばししていた。いつ、どんなかたちで現われても不思議でないこの問題から目をそむけていた、と言ってもいい。親の老いを認めたくなかつたのだ、きっと。時間はまだいっぱいある、そう思おうとしていたのだ、おそらく。

今日も、遅刻しないで学校へ行けただろうか。

座れば朝食が用意されていたあの食卓が、いまは広々と空っぽに広がっていることだろう。兄弟はパンを焼き、おそらく冷たいままの牛乳を呑み込むようにして出掛けて行ったにちがいない。夕食は、今日はどこで何を買ってきて済ましたのだろうか。

私は黙って、傍らの妹の顔を見る。

約束をしたわけではないが、私たちは置いてきた家族の話をしなかつた。

妹もこんなふうに、こんな思いで、私の顔を見詰めたことが何度もあつたにちがいない。……いつになったら戻ってやれるのだろうか、子供たちの待つ家へ。帰れる日を約束できるのなら待つほうも、待たせるほうも、もう少し気持ち軽いのだけれど、見通しなどどこにもつけようがなかつた。……戻ったとき、前と同じ家族の続きをちゃんと出来るのだろうか。胸のふさがるような思いで父親の顔を盗み見る、自分の浅ましい目を覆いたかつた。

父のうごんを嚼るその口元にも、ちり蓮華を扱つ手捌きにも、しっかりと見覚えのある品格が残っていた。

先刻の、着物を着る動作もそつだつた。過ぎてきた日々の中で身に付いた習性

は、父の感情や意識とは無関係に、すこしも損なわれない完全なかたちで再現され、私たちを動揺させるのだ。

「ぼんやりしてないで、のびないうちに食べてしまいなさい」

父が、健康であった頃の父親の表情と口調で娘を咎めた。私はおもわず釣られて、「はいっ」と、緊張した返事をし、慌ててうどんを嚙ることに熱中する……。すると、涙と鼻水が予告もなしに奇襲攻撃してきた。

妹はそんな私の様子には気づかず、打って変わった父の口調を面白がって、小さく、くくつ、と笑って肩をすくめた。

「……いい夜だ」

満足げに父が呟いた。

そうだった。ほんとうにいい夜だった……。

+

花が散り、若葉が萌え、やがては枯葉となって葉を落とした裸木も、季節が巡ってくるるとまた、蕾をつける……。なのになぜ人の時間は戻せないのだ、と決め付けるのだろうか。巡る、という形容ではないにしても、不意に訪れてくる懐かしい人のように、過ぎ去った日の忘れてしまっていたある瞬間がフラッシュバックして、今の、この状況に寸分の狂いもなく重なる時がある。

そんな経験が一度もないのだろうか。……きつと気づかないだけなのだ。

私の先刻が、まさしくそれだったような気がする。

炬燵に入ってうたた寝をして夢を見たのではない。おなじ風が吹いたのだ。

父と妹と三人で炬燵を囲んで過ごした泣き笑いの、あの『いい夜』、と同じ風が……。雪降りの前は気温が急激に下がり、頃合もあの時と同じく雪が降りだした。雪は黙って降り、ひっそりと積もるので、人が家の中に閉じこもる夜半に降った雪には朝になってから驚かされることが多い。でもこの時、聴覚はその雪に吸い込まれた音を拾っていたのだ。……私は思わず炬燵に身体を埋めた。その感触、と温もった匂い。そして、どこからか忍び込んでくる雪降りの匂い。更に、どうにも抗えなかった睡魔。

……意識の底で、私はあの夜とまったくおなじ風を受け止めていたのだ。

そうだった。不覚にも妹と寄り添うように眠り込んでしまった夜が、確かに過



去に存在していたではないか……。

私は、とてもこずった厄介な方程式を解き終えた区切りのように、先刻と同じく炬燵の枠に沿うように横になった。

横になった鼻先に、あの緋色の座布団がある。

……そうか、この姿勢の状態ですべての視界の全てを占めることになったこの座布団こそが、あの夜と、この夜の、メディアだったのだ。

そんなことを考えながら、私はまた眠りの中に引きずり込まれようとしていた。その時に、その音は起こった。キュツ、キュツ、と二度。織物に爪をたてて引くような鋭い音だ。とろけかけていた神経が瞬時に尖った。(いまの音は何?) しかし音はそれつきりだった。

やがてその緊張も萎え、再び睡魔の波が寄せてきて、呑み込まれかけた。

するとまた、あの音が私を引き戻した。今度のはかなりはつきりしていて、その音が視えた。鼻先にある座布団に爪をたてて引っ掻く音だ。

(だれ……?)

実際には怖くて声にはならなかった。物理的にも起きるはずのない音だったのだから。睡魔は欠けらさえ残さずに退散していた、が、この肉体は金縛り状態に固まったままピクリとも動かさなかった。

ずいぶんと時間が経ってから、怖ず怖ずと身体を動かしてみた。ああ、動ける! 私は迷わず傍らの座布団に腕を絡ませて抱え込み、掌で幼い子をなだめすかすように調子をとって優しくあやした。

「あなたはお母さんとの約束を守って、あの翌年の六月に私たちのところへ帰ってきてくれたわ。それからずつと皆で暮らして、そして二十六で好きな人のところへお嫁に行ったのよ。そうでしょっ? そのはずよ。……なのに、あなたは時々ふたりになる、今夜のようにな」

あの子が帰ってきてくれたのだ。そのことを誰よりも信じていたはずの母が、亡くなる間際に数えてみせた妹のその歳の数に六つ少なかった……。

もしかしたら、いま爪をたててみせたのは亡くなった妹ではなく、母の懐いだったのだろうか。母の心の乱れが、妹を一人にしたり二人にしたりして、まだ私を惑わせる。

この夜の所在無げな私を案じた母が、妹を寄り添わしてくれたのかもしれないのに、私の混乱が、また母を焦らしてしまったのかもしれない。

もし今夜、風の声を聴かなかつたら、風の匂い、風の感触、風が運んできたエーテルのようなものたち、が遠い記憶を再現して見せてくれなかつたら、私はまだ忘れたままでいただろう。

声をたてて笑うことも、微笑むことも、涙を流すことも、ドキドキすることも、たくさんのお愛の中にいたことも……。

父の旅立ちを見送った後、妹を東京の家に送り無事に歩きだすのを見届けたが、私に元通りの生活は戻らなかった。

あれからの歳月を、私は壊れたカメラのように埃をかぶってころがっていただけなのかもしれない。内蔵されてはいたが、何も焼き付けられなかつたフィルムのように、空白が歴史だったことになる。

だから今夜、おなじ風が吹いて、それをおなじ風だと気づけたのも、ようやく捕まえることができたのも、緋色の座布団という強力なメディアの助けがあつたからかもしれない。それほど私の心はさびびりしてしまっていた。それほど私は、この家ごと大きな蓋を被って長いこと潜んでいたのだ。

この夜、いちどきに送信されてきた遙か遠くからのメッセージは、あまりに沢山過ぎて私の受信装置の許容範囲を越え、いつときパニックに陥ったりもしたけれど、でも、甘くて、酸っぱくて、ほろ苦くて、賑やかな夜だった……。と、いまは思える。

妙にくすぐったいので手をやると、頬がぬれていた。

充たされた夜が風をからめて退いてゆく余韻なのか、かたまりが融解する際の一症状なのか、頬がいつまでも、いつまでもくすぐったかった。

了